

up \LaTeX 2 ϵ について

中野 賢 & 日本語 \TeX 開発コミュニティ & TTK

作成日：2021/02/25

up \LaTeX は、内部コードを Unicode 化した p \LaTeX の拡張版です。このバージョンは、「コミュニティ版 p \LaTeX 2 ϵ 」をベースにしています。

p \TeX は、高品質の日本語組版ソフトウェアとしてデファクトスタンダードの地位にあるといえます。しかし、p \TeX には

- 直接使える文字集合が原則的に JIS X 0208 (JIS 第 1,2 水準) の範囲に限定されていること、
- 8bit の非英語欧文との親和性が高いとは言えないこと、
- p \TeX の利用が日本語に限られ、中国語・韓国語との混植への利用が進んでいないこと

といった弱点がありました。

これらの弱点を克服するため、p \TeX の内部コードを Unicode 化した拡張版が up \TeX です。また、up \TeX 上で用いる Unicode 版 p \LaTeX が up \LaTeX です¹。現在の up \LaTeX は、日本語 \TeX 開発コミュニティが配布しているコミュニティ版 p \LaTeX ² をベースにしており、 ϵ -up \TeX というエンジン (up \TeX の ϵ -p \TeX 拡張版) で動作します。

開発中の版は p \LaTeX と同様に、GitHub のリポジトリ³で管理しています。up \LaTeX はアスキーとは無関係ですので、バグレポートはアスキー宛てではなく、日本語 \TeX 開発コミュニティに報告してください。 \TeX Forum や GitHub の Issue システムが利用できます。

¹<http://www.t-lab.opal.ne.jp/tex/uptex.html>

²<https://github.com/texjporg/platex>

³<https://github.com/texjporg/uplatex>

1 この文書について

この文書は $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ の概要を示していますが、使い方のガイドではありません。ほとんどの機能は元となっている $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ や $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ と同等ですので、それぞれの付属文書などを参照してください。

$\text{upT}_{\text{E}}\text{X}$ については公式ウェブサイトあるいは [1] (英語) を参照してください。この文書の構成は次のようになっています。

第 1 節 この節です。この文書についての概要を述べています。

第 2 節 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ で拡張した機能についての概要です。付属のクラスファイルやパッケージファイルについても簡単に説明しています。

第 3 節 現在のバージョンの $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ と旧バージョン、あるいは元となっている $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}/\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ との互換性について述べています。

付録 A この文書ソース (`uplatex.dtx`) の `DOCSTRIP` のためのオプションについて述べています。

付録 B $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ の `dtx` ファイルをまとめて、一つのソースコード説明書にするための文書ファイルの説明をしています。

付録 C 付録 B で説明した文書ファイルを処理する `sh` スクリプト (手順) などについて説明しています。

2 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ の機能について

$\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ が提供するファイルは、次の 3 種類に分類することができます。この構成は $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ と同様です。

- フォーマットファイル
- クラスファイル
- パッケージファイル

2.1 フォーマットファイル

$\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ のフォーマットファイルを作成するには、ソースファイル “`uplatex.ltx`” を $\epsilon\text{-upT}_{\text{E}}\text{X}$ の INI モードで処理します⁴。ただし、 $\text{T}_{\text{E}}\text{X Live}$ や $\text{W32T}_{\text{E}}\text{X}$ ではこの処

⁴2016 年以前は $\text{upT}_{\text{E}}\text{X}$ と $\epsilon\text{-upT}_{\text{E}}\text{X}$ のどちらでもフォーマットを作成することができましたが、2017 年に $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ が $\epsilon\text{-T}_{\text{E}}\text{X}$ 必須となったことに伴い、 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ も $\epsilon\text{-upT}_{\text{E}}\text{X}$ が必須となりました。

理を簡単にする `fmtutil-sys` あるいは `fmtutil` というプログラムが用意されています。以下を実行すれば、フォーマットファイル `uplatex.fmt` が作成されます。

```
fmtutil-sys --byfmt uplatex
```

次のリストが、`uplatex.ltx` の内容です。ただし、このバージョンでは、 \LaTeX から $\text{up}\text{\LaTeX}$ への拡張を `plcore.ltx` ($\text{p}\text{\LaTeX}$ によって提供される) および `uplcore.ltx` をロードすることで行ない、`latex.ltx` には直接、手を加えないようにしています。したがって `uplatex.ltx` はとても短いものとなっています。`latex.ltx` には \LaTeX のコマンドが、`uplcore.ltx` には $\text{up}\text{\LaTeX}$ で拡張したコマンドが定義されています。

```
1 \*plcore)
```

`latex.ltx` の末尾で使われている `\dump` をいったん無効化します。

```
2 \let\orgdump\dump
3 \let\dump\relax
```

`latex.ltx` を読み込みます。 \TeX Live の標準的インストールでは、この中で `Babel` 由来のハイフネーション・パターン `hyphen.cfg` が読み込まれるはずですが。

```
4 \input latex.ltx
```

この時点で `\typeout` が未定義なら、 \LaTeX カーネルの読み込みに失敗していますので、強制終了します (\LaTeX 2_ϵ 2017/01/01 以降を非 ϵ - \TeX 拡張でフォーマット作成しようとした場合など)。

```
5 \ifx\typeout\undefined
6 \errhelp{Please reinstall LaTeX, or check e-TeX availability.}%
7 \errmessage{Failed to load 'latex.ltx' properly}%
8 \expandafter\end
9 \fi
```

`plcore.ltx` と `uplcore.ltx` を読み込みます。

```
10 \typeout{*****^J%
11      *^J%
12      * making upLaTeX format^J%
13      *^J%
14      *****}
15 \makeatletter
16 \input plcore.ltx
17 \input uplcore.ltx
```

フォント関連のデフォルト設定ファイルである、`upldefs.ltx` を読み込みます。 \TeX の入力ファイル検索パスに設定されているディレクトリに `upldefs.cfg` ファイルがある場合は、そのファイルを使います。読み込み後にコードが実行されるかもしれません。

```
18 \InputIfFileExists{upldefs.cfg}
19      {\typeout{*****^J%
20      * Local config file upldefs.cfg used^J%
```

```

21 *****}%
22 {\input{upldefs.ltx}}
23 \ifx\code@after@pldefs\@undefined\else \code@after@pldefs \fi

```

以前のバージョンでは、フォーマット作成時に upL^AT_εX のバージョンがわかるように、端末に表示していましたが、\everyjob にバナー表示以外のコードが含まれる可能性を考慮し、安全のためやめました。

```
24 %\the\everyjob
```

upL^AT_εX の起動時に uplatex.cfg がある場合、それを読み込むようにします (pL^AT_εX が platex.cfg を読み込むのと同様)。バージョン 2016/07/01 ではコードを uplcore.ltx に入れていましたが、uplatex.ltx へ移動しました。

```

25 \everyjob\expandafter{%
26   \the\everyjob
27   \IfFileExists{uplatex.cfg}{%
28     \typeout{*****^J%
29             * Loading uplatex.cfg.^J%
30             *****}%
31   \input{uplatex.cfg}}{%
32 }

```

フォーマットファイルにダンプします。

```

33 \let\dump\orgdump
34 \let\orgdump\@undefined
35 \makeatother
36 \dump
37 \endinput
38 </plcore>

```

実際に upL^AT_εX への拡張を行なっている uplcore.ltx は、DOCSTRIP プログラムによって、次のファイルの断片が連結されたものです。

- uplvers.dtx は、upL^AT_εX のフォーマットバージョンを定義しています。

また、プリロードフォントや組版パラメータなどのデフォルト設定は、uplatex.ltx の中で upldefs.ltx をロードすることにより行います⁵。このファイル upldefs.ltx も uplfonts.dtx から生成されます。

注意：

このファイルに記述されている設定を変更すれば upL^AT_εX をカスタマイズすることができますが、その場合は upldefs.ltx を直接修正するのではなく、いったん upldefs.cfg という名前でコピーして、そのファイルを編集してください。フォー

⁵旧版では uplcore.ltx の中でロードしていましたが、2018 年以降の新しいコミュニティ版 upL^AT_εX では uplatex.ltx から読み込むことにしました。

マット作成時に `upldefs.cfg` が存在した場合は、そちらが `upldefs.ltx` の代わりに読み込まれます。

ここまで見てきたように、`upLATEX` の各ファイルはそれぞれ `pLATEX` での対応するファイル名の頭に “u” を付けた名前になっています。

2.1.1 バージョン

`upLATEX 2ε` のバージョンやフォーマットファイル名は、`uplvers.dtx` で定義しています。これは、`pLATEX 2ε` のバージョンやフォーマットファイル名が `plvers.dtx` で定義されているのと同じです。

2.1.2 NFSS2 コマンド

`upLATEX 2ε` は `pLATEX 2ε` と共通の `plcore.ltx` を使用していますので、NFSS2 の和文フォント選択への拡張が有効になっています。

2.1.3 出力ルーチンとフロート

`upLATEX 2ε` は `pLATEX 2ε` と共通の `plcore.ltx` を使用していますので、出力ルーチンや脚注マクロなどは `pLATEX 2ε` と同じように動作します。

2.2 クラスファイルとパッケージファイル

`upLATEX 2ε` が提供をするクラスファイルやパッケージファイルは、`pLATEX 2ε` に含まれるファイルを基にしています。

`upLATEX 2ε` に付属のクラスファイルは、次のとおりです。

- `ujarticle.cls`, `ujbook.cls`, `ujreport.cls`

横組用の標準クラスファイル。`ujclasses.dtx` から作成される。それぞれ `jarticle.cls`, `jbook.cls`, `jreport.cls` の `upLATEX` 版。

- `utarticle.cls`, `utbook.cls`, `utreport.cls`

縦組用の標準クラスファイル。`ujclasses.dtx` から作成される。それぞれ `tarticle.cls`, `tbook.cls`, `treport.cls` の `upLATEX` 版。

なお `jltxdoc.cls` の `upLATEX` 版はありませんが、これは `pLATEX` のものが `upLATEX` でもそのまま使えます。

また、`upLATEX 2ε` に付属のパッケージファイルは、次のとおりです。

- `uptrace.sty`

`ptrace.sty` の `upLaTeX` 版。LaTeX でフォント選択コマンドのトレースに使う `tracefnt.sty` が再定義してしまう NFSS2 コマンドを、`upLaTeX 2ε` 用に再々定義するためのパッケージ。 `uplfonts.dtx` から作成される。

他の `pLaTeX` のパッケージは、`upLaTeX` でもそのまま動作します。

3 他のフォーマット・旧バージョンとの互換性

ここでは、この `upLaTeX 2ε` のバージョンと以前のバージョン、あるいは `pLaTeX 2ε/LaTeX 2ε` との互換性について説明をしています。

3.1 `pLaTeX 2ε` および `LaTeX 2ε` との互換性

`upLaTeX 2ε` は、`pLaTeX 2ε` の上位互換という形を取っていますので、クラスファイルやいくつかのコマンドを置き換えるだけで、たいていの `pLaTeX 2ε` 文書を簡単に `upLaTeX 2ε` 文書に変更することができます。ただし、`upLaTeX 2ε` のデフォルトの日本語フォントメトリックは `pLaTeX 2ε` のそれと異なりますので、レイアウトが変化することがあります。また、`LaTeX 2ε` のいくつかの命令の定義も変更していますので、`LaTeX 2ε` で処理できるファイルを `upLaTeX 2ε` で処理した場合に完全に同じ結果になるとは限りません。

また、`upLaTeX 2ε` は新しいマクロパッケージですので、2.09 互換モードをサポートしていません。`LaTeX 2ε` の仕様に従ってドキュメントを作成してください。

`pLaTeX 2ε` 向けあるいは `LaTeX 2ε` 向けに作られた多くのクラスファイルやパッケージファイルはそのまま使えると思います。ただし、例えばクラスファイルが `pLaTeX` 標準の漢字エンコーディング (JY1, JT1) を前提としている場合は、`upLaTeX` で採用した漢字エンコーディング (JY2, JT2) と合致せずにエラーが発生してしまいます。この場合は、そのクラスファイルが `upLaTeX` に対応していないことになります。このような場合は、`pLaTeX` を使い続けるか、その作者に連絡して `upLaTeX` に対応してもらうなどの対応をとってください。

3.2 `latexrelease` パッケージへの対応

LaTeX <2015/01/01>で導入された `latexrelease` パッケージをもとに、新しい `pLaTeX` では `platexrelease` パッケージが用意されました。本来は `upLaTeX` でも同様のパッケージを用意するのがよいのですが、現在は `pLaTeX` から `upLaTeX` への変更点が含まれていませんので、幸い `platexrelease` パッケージをそのまま用いることができます。このため、`upLaTeX` で独自のパッケージを用意することはしていません。

platexrelease パッケージを用いると、過去の upL^AT_EX をエミュレートしたり、フォーマットを作り直すことなく新しい upL^AT_EX を試したりすることができます。詳細は platexrelease のドキュメントを参照してください。

A DOCSTRIP プログラムのためのオプション

この文書のソース (uplatex.dtx) を DOCSTRIP プログラムで処理することによって、いくつかの異なるファイルを生成することができます。DOCSTRIP プログラムの詳細は、docstrip.dtx を参照してください。

この文書の DOCSTRIP プログラムのためのオプションは、次のとおりです。

オプション	意味
plcore	フォーマットファイルを作るためのファイルを生成
pldoc	upL ^A T _E X 2 _ε のソースファイルをまとめて組版するための文書ファイル (upldoc.tex) を生成
shprog	上記のファイルを作成するための sh スクリプトを生成
Xins	上記の sh スクリプトや perl スクリプトを取り出すための DOCSTRIP バッチファイル (Xins.ins) を生成

B 文書ファイル

ここでは、このパッケージに含まれている dtx ファイルをまとめて組版し、ソースコード説明書を得るための文書ファイル upldoc.tex について説明をしています。個別に処理した場合と異なり、変更履歴や索引も付きます。

デフォルトではソースコードの説明が日本語で書かれます。もし英語の説明書を読みたい場合は、

```
\newif\ifJAPANESE
```

という内容の uplatex.cfg を予め用意してから upldoc.tex を処理してください (2016 年 7 月 1 日以降の upL^AT_EX 2_ε が必要)。

コードは pL^AT_EX 2_ε のものと (ファイル名を除き) ほぼ同一なので、ここでは違っている部分だけ説明します。

```
39 <*pldoc>
40 \begin{filecontents}{upldoc.dic}
41 西暦    せいれき
42 和暦    われき
43 \end{filecontents}
```

plATEX 2_ε のドキュメントでは、plext.dtx の中で組み立てるサンプルのために plect パッケージが必要ですが、upLATEX 2_ε のファイルにはそのようなサンプルが含まれないので除外しています。

```

44 \documentclass{jltxdoc}
45 %\usepackage{plext} %% comment out for upLaTeX
46 \listfiles
47
48 \DoNotIndex{\def,\long,\edef,\xdef,\gdef,\let,\global}
49 \DoNotIndex{\if,\ifnum,\ifdim,\ifcat,\ifmmode,\ifvmode,\ifhmode,%
50             \iftrue,\iffalse,\ifvoid,\ifx,\ifeof,\ifcase,\else,\or,\fi}
51 \DoNotIndex{\box,\copy,\setbox,\unvbox,\unhbox,\hbox,%
52             \vbox,\vtop,\vcenter}
53 \DoNotIndex{@empty,\immediate,\write}
54 \DoNotIndex{\egroup,\bgroup,\expandafter,\begingroup,\endgroup}
55 \DoNotIndex{\divide,\advance,\multiply,\count,\dimen}
56 \DoNotIndex{\relax,\space,\string}
57 \DoNotIndex{\csname,\endcsname,@spaces,\openin,\openout,%
58             \closein,\closeout}
59 \DoNotIndex{\catcode,\endinput}
60 \DoNotIndex{\jobname,\message,\read,\the,\m@ne,\noexpand}
61 \DoNotIndex{\hsize,\vsize,\hskip,\vskip,\kern,\hfil,\hfill,\hss,\vss,\unskip}
62 \DoNotIndex{\m@ne,\z@,\z@skip,\@ne,\tw@,\p@,\@minus,\@plus}
63 \DoNotIndex{\dp,\wd,\ht,\setlength,\addtolength}
64 \DoNotIndex{\newcommand,\renewcommand}
65
66 \ifJAPANESE
67 \IndexPrologue{\part*{索引}}%
68             \markboth{索引}{索引}%
69             \addcontentsline{toc}{part}{索引}%
70 イタリア体の数字は、その項目が説明されているページを示しています。
71 下線の引かれた数字は、定義されているページを示しています。
72 その他の数字は、その項目が使われているページを示しています。}
73 \else
74 \IndexPrologue{\part*{Index}}%
75             \markboth{Index}{Index}%
76             \addcontentsline{toc}{part}{Index}%
77 The italic numbers denote the pages where the corresponding entry
78 is described, numbers underlined point to the definition,
79 all others indicate the places where it is used.}
80 \fi
81 %
82 \ifJAPANESE
83 \GlossaryPrologue{\part*{変更履歴}}%
84             \markboth{変更履歴}{変更履歴}%
85             \addcontentsline{toc}{part}{変更履歴}}
86 \else
87 \GlossaryPrologue{\part*{Change History}}%
88             \markboth{Change History}{Change History}%
89             \addcontentsline{toc}{part}{Change History}}

```



```

90 \fi
91
92 \makeatletter
93 \def\changes@#1#2#3{%
94   \let\protect@unexpandable@protect
95   \edef\@tempa{\noexpand\glossary{#2\space
96             \currentfile\space#1\levelchar
97             \ifx\saved@macroname\@empty
98               \space\actualchar\generalname
99             \else
100              \expandafter\@gobble
101              \saved@macroname\actualchar
102              \string\verb\quotechar*%
103              \verbatimchar\saved@macroname
104              \verbatimchar
105            \fi
106            :\levelchar #3}}%
107   \@tempa\endgroup\@esphack}
108 \renewcommand*{\MacroFont{\fontencoding\encodingdefault
109                       \fontfamily\ttdefault
110                       \fontseries\mddefault
111                       \fontshape\updefault
112                       \small
113                       \hfuzz 6pt\relax}
114 \renewcommand*{\l@section{\@dottedtocline{2}{1.5em}{2.8em}}
115 \renewcommand*{\l@subsubsection{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.4em}}
116 \makeatother
117 \RecordChanges
118 \CodelineIndex
119 \EnableCrossrefs
120 \setcounter{IndexColumns}{2}
121 \settowidth{\MacroIndent{\ttfamily\scriptsize 000\ }}

```

この文書のタイトル・著者・日付を設定します。

```

122 \title{The \upLaTeXe\ Sources}
123 \author{Ken Nakano \& Japanese \TeX\ Development Community \& TTK}
124
125 % Get the (temporary) date and up-patch level from uplvers.dtx
126 \makeatletter
127 \let\patchdate=\@empty
128 \begingroup
129   \def\ProvidesFile#1[#2 #3]#4\def\uppatch@level#5{%
130     \date{#2}\xdef\patchdate{#5}\endinput}
131   \input{uplvers.dtx}
132 \endgroup
133
134 % Add the patch version if available.
135 \def\Xpatch{}
136 \ifx\patchdate\Xpatch\else
137   \edef\@date{\@date\space version \patchdate}

```

```

138 \fi
139
140 % Obtain the last update info, as upLaTeX does not change format date
141 % -> if successful, reconstruct the date completely
142 \def\lastupd@te{0000/00/00}
143 \begingroup
144   \def\ProvidesFile#1[#2 #3]{%
145     \def\@tempd@te{#2}\endinput
146     \@ifl@t@r{\@tempd@te}{\lastupd@te}{%
147       \global\let\lastupd@te\@tempd@te
148     }{}}
149   \let\ProvidesClass\ProvidesFile
150   \let\ProvidesPackage\ProvidesFile
151   \input{uplvers.dtx}
152   \input{uplfonts.dtx}
153   \input{ukinsoku.dtx}
154   \input{ujclasses.dtx}
155 \endgroup
156 \@ifl@t@r{\lastupd@te}{0000/00/00}{%
157   \date{Version \patchdate\break (last updated: \lastupd@te)}}%
158 }{}
159 \makeatother

    ここからが本文ページとなります。

160 \begin{document}
161 \pagenumbering{roman}
162 \maketitle
163 \renewcommand\maketitle{}
164 \tableofcontents
165 \clearpage
166 \pagenumbering{arabic}
167
168 \DocInclude{uplvers}   % upLaTeX version
169
170 \DocInclude{uplfonts} % NFSS2 commands
171
172 \DocInclude{ukinsoku} % kinsoku parameter
173
174 \DocInclude{ujclasses} % Standard class
175
176 \StopEventually{\end{document}}
177
178 \clearpage
179 \pagestyle{headings}
180 % Make TeX shut up.
181 \hbadness=10000
182 \newcount\hbadness
183 \hfuzz=\maxdimen
184 %
185 \PrintChanges

```

```

186 \clearpage
187 %
188 \begingroup
189 \def\endash{--}
190 \catcode'\-\active
191 \def-\{\futurelet\temp\indexdash}
192 \def\indexdash{\ifx\temp-\endash\fi}
193
194 \PrintIndex
195 \endgroup
196 \let\PrintChanges\relax
197 \let\PrintIndex\relax
198 \end{document}
199 \pdoc)

```

C おまけプログラム

C.1 シェルスクリプト mkpdoc.sh

upL^AT_EX 2_ε のマクロ定義ファイルをまとめて組版し、変更履歴と索引も付けるときに便利なシェルスクリプトです。このシェルスクリプトの使用方法は次のとおりです。

```
sh mkpdoc.sh
```

コードは pL^AT_EX 2_ε のものと（ファイル名を除き）ほぼ同一なので、ここでは違っている部分だけ説明します。

```

200 {*shprog}
201 {ja}rm -f upldoc.toc upldoc.idx upldoc.glo
202 {en}rm -f upldoc-en.toc upldoc-en.idx upldoc-en.glo
203 echo "" > ltxdoc.cfg
204 {ja}uplatex upldoc.tex
205 {en}uplatex -jobname=upldoc-en upldoc.tex

```

変更履歴や索引の生成には `mendex` を用いますが、upL^AT_EX の場合は UTF-8 モードで実行する必要がありますので、`-U` というオプションを付けます⁶。makeindex コマンドには、このオプションがありません。

```

206 {ja}mendex -U -s gind.ist -d upldoc.dic -o upldoc.ind upldoc.idx
207 {en}mendex -U -s gind.ist -d upldoc.dic -o upldoc-en.ind upldoc-en.idx
208 {ja}mendex -U -f -s gglo.ist -o upldoc.gls upldoc.glo
209 {en}mendex -U -f -s gglo.ist -o upldoc-en.gls upldoc-en.glo
210 echo "\includeonly{" > ltxdoc.cfg
211 {ja}uplatex upldoc.tex
212 {en}uplatex -jobname=upldoc-en upldoc.tex

```

⁶uplatex コマンドも実際には UTF-8 モードで実行する必要がありますが、デフォルトの内部漢字コードが UTF-8 に設定されているはずですので、`-kanji=utf8` を付けなくても処理できると思います。

```

213 echo "" > ltxdoc.cfg
214 <ja>uplatex upldoc.tex
215 <en>uplatex -jobname=upldoc-en upldoc.tex
216 # EOT
217 </shprog>

```

C.2 perl スクリプト dstcheck.pl

pL^AT_εE_X2_ε のものがそのまま使えるので、upL^AT_εE_X2_ε では省略します。

C.3 DOCSTRIP バッチファイル

付録 C.1 で説明をしたスクリプトを、このファイルから取り出すための DOCSTRIP バッチファイルです。コードは pL^AT_εE_X2_ε のものと（ファイル名を除き）ほぼ同一なので、説明は割愛します。

```

218 <*Xins>
219 \input docstrip
220 \keepsilent

221 {\catcode'#=12 \gdef\MetaPrefix{## }}

222 \declarepreamble\thispre
223 \endpreamble
224 \usepreamble\thispre

225 \declarepostamble\thispost
226 \endpostamble
227 \usepostamble\thispost

228 \generate{
229   \file{mkpldoc.sh}{\from{uplatex.dtx}{shprog,ja}}
230   \file{mkpldoc-en.sh}{\from{uplatex.dtx}{shprog,en}}
231 }
232 \endbatchfile
233 </Xins>

```

参考文献

- [1] Takuji Tanaka, UpTeX — Unicode version of pTeX with CJK extensions.
TUGboat issue 34:3, 2013.
(<http://tug.org/TUGboat/tb34-3/tb108tanaka.pdf>)

変更履歴

2011/05/07 v1.0c-u00		みを <code>uplcore.ltx</code> から	
・ p \LaTeX 用から up \LaTeX 用に修正。		<code>uplatex.ltx</code> へ移動 (based on	
(based on <code>platex.dtx</code>		<code>platex.dtx</code> 2017/12/05 v1.0s) ..	3
1997/01/29 v1.0c)	1	2017/12/10 v1.0s-u02	
2016/05/08 v1.0h-u00		・ <code>uplcore.ltx</code> の前に <code>plcore.ltx</code>	
・ ドキュメントから <code>uplpatch.ltx</code>		を読み込むようにした (最近の	
を除外 (based on <code>platex.dtx</code>		p \LaTeX が前提)	3
2016/05/08 v1.0h)	9	2018/04/08 v1.0w-u02	
2016/06/06 v1.0k-u01		・ 安全のためフォーマット作成時の	
・ up \LaTeX 用にドキュメントを全体		バナー表示をやめた (based on	
的に改訂	1	<code>platex.dtx</code> 2018/04/08 v1.0w) ..	4
2016/06/19 v1.0l-u01		2018/09/03 v1.0x-u02	
・ パッチレベルを <code>uplvers.dtx</code> から		・ ドキュメントを更新 (based on	
取得 (based on <code>platex.dtx</code>		<code>platex.dtx</code> 2018/09/03 v1.0x) ..	1
2016/06/19 v1.0l)	9	2018/09/22 v1.0y-u02	
2016/08/26 v1.0m-u01		・ 最終更新日を <code>upldoc.pdf</code> に表示	
・ <code>uplatex.cfg</code> の読み込みを		(based on <code>platex.dtx</code>	
<code>uplcore.ltx</code> から <code>uplatex.ltx</code>		2018/09/22 v1.0y)	9
へ移動 (based on <code>platex.dtx</code>		2019/05/22 v1.0y-u03	
2016/08/26 v1.0m)	4	・ ドキュメントを更新	1
2017/11/29 v1.0q-u01		2020/09/28 v1.1b-u03	
・ 英語版ドキュメントを追加 (based		・ <code>defs</code> 読込後にフック追加	3
on <code>platex.dtx</code> 2017/11/29		2021/02/25 v1.1c-u03	
v1.0q)	1	・ <code>latex.ltx</code> の読込チェック	3
2017/12/05 v1.0s-u01			
・ デフォルト設定ファイルの読み込			